1

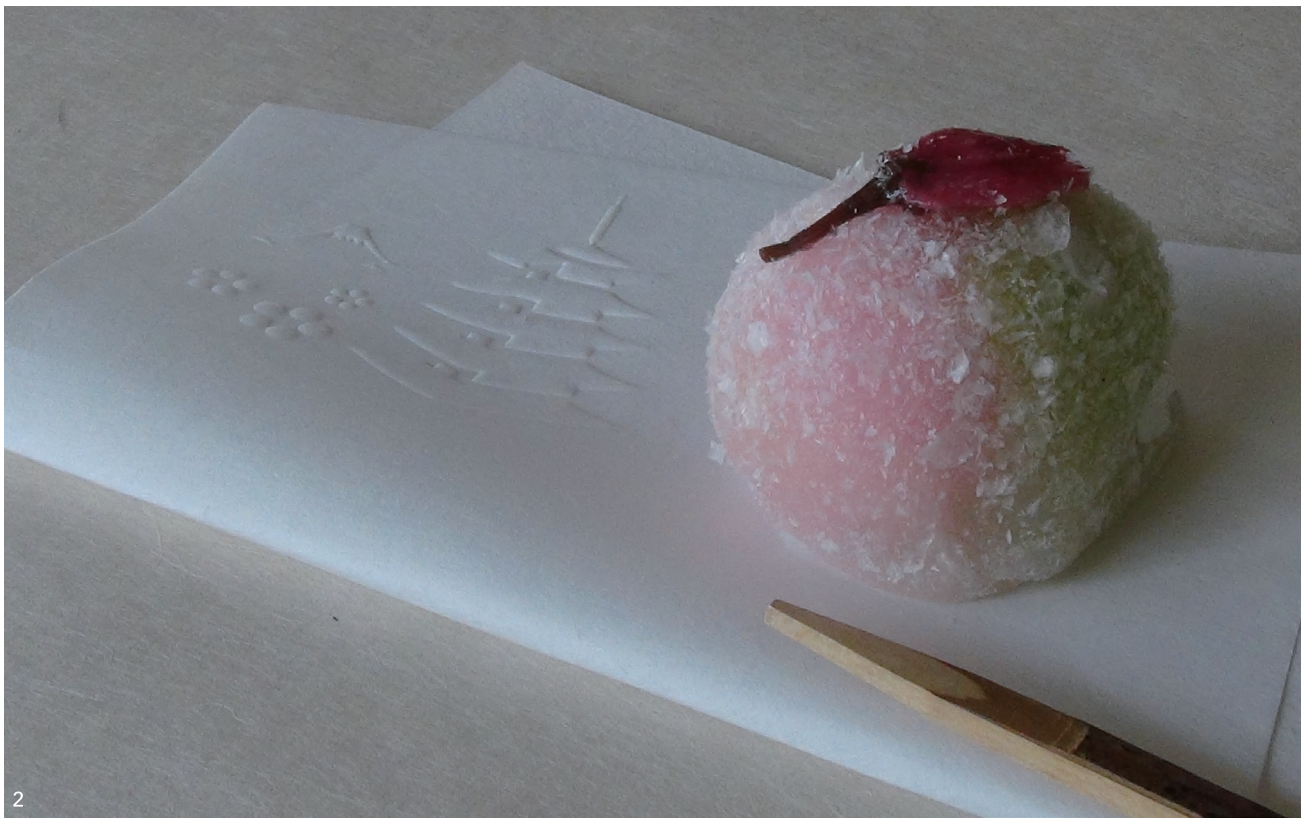
vol.17

風につたへし

「その風を得て、心より心に伝ふる花なれば、風姿花伝と名づく」（世阿弥）。
――水のような清らかな心で、遺風に想いを馳せ、そして新風を試みながら。
新鋭書家が日々の中で“気づき”を綴る、連載エッセイ。

TOKYO2020 過現未の線上で目にしたもの

文／木下真理子



2

如月の半ばを過ぎた頃。近所にある古民家で梅がほころんだ。舗道と塀の隙間に顔をのぞかせる一本の梅の木。恥ずかしそうに頬を桃色に染めた小さな花びらを見て、あぁ今年も春が巡ってきたと実感した。

例年、花見の時期は「花盛り」という言葉もおとなしく感じるほど、街は桜で埋め尽くされる。ただ、今年は新型コロナウイルスの影響で、外出制限された。

夏に開催予定だった東京オリンピックも、とうとう一年の延期となり、まさに私たちは歴史の当事者となっている。

オリンピックによる経済効果を見込んで、ここ数年、東京の中心部では都市開発が推進されてきた。若者文化や流行の発信地の一つである「渋谷」も、高層ビルや駅の地下などで工事が今も進行している。

その裏側では、長らく渋谷の顔だった「東急東横店」が、この三月をもって八十五年の歴史に幕を下ろした。

東急東横店は「東横百貨店」の名で一九三四（昭和九）年に誕生した、関東初の私鉄直営のターミナルデパートだった。「東横のれん街」という昔ながらの食の名店街は、数年前に隣接する「MARK CITY」へ移転したものの、昭和から続いてきた、雑多で熱気ある商いの風情は、もうそこには存在しない。

昨年、全面改装した後で営業再開した「PARCO」も、ぐっと様変わりした。フラットで無機質な空間は、どこか近未来的な装い。目玉の一つとされている六階は、任天堂をはじめ、〝クールジャパン〟戦略を意識した店舗がいくつも並び、訪日外国人が入れ代り立ち代り訪れている。

一転、地下は昭和横丁を彷彿とさせる。大衆食堂的な店が軒を連ね、その一角にはアナログレコード店もある。レトロな演出は、最近の若者の懐事情を汲んでのことと思えなくもない。

このフロアは、改装前には輸入本や希少本がたくさん並んでいた「パルコブックセンター」（前身は洋書専門店「LOGOS」渋谷店）だった。

新生パルコから本屋が消えたことも、時代の動向を照らしているとはいえ、あらゆる知識に直接触れることが出来て、人生を豊かなものにしてきた書店文化は、このまま衰退の一途を辿ってしまうのだろうか。

パルコから程近い道玄坂の周辺は、明治時代に与謝野鉄幹・晶子、高村光太郎や石川啄木などが、歌によって浪漫主義運動を繰り広げた地であったという。古来、日本文化の代表格といえば和歌だった。それも遠き昔日の幻影。

時の流れの中で、新たに誕生するものと淘汰されてゆくもの――。

渋谷の駅周辺は、再開発によって空が高く見えるようになったと思う。でも、街ゆく人の多くは、雲一つ無い青空が広がっていても気にとめることなく、スマホの画面を覗き込み、バーチャルな世界に没入している。

先の東横店では、閉店に際して、八十五年を振り返る「東横デパートの思ひ出展」が催されていた。街並みや人々の様子を捉えた数々のモノクロームの写真には、うつむいている人は一人も写っていなかった。

自宅に帰って、『木村伊兵衛の昭和』という写真集も開いてみた。戦前・戦中・戦後の、貧しくて過酷な暮らしの記憶がまだ残っていても、写真の中の人々の眼差しは、空を仰ぎ、熱を帯びている。

彼らは、敗戦から人類史上最速とまで言われているスピードで立ち直った自国に、誇りを抱いていたに違いない。

一九六四(昭和三九)年、日本で初めてオリンピックが開催された。首都高速やモノレールという新しいインフラが設置され、夢の時速二〇〇キロ台を走る超特急・新幹線が登場。テレビのカラー化も自ずと広がり、LPレコードのブームなども起こった。

当時も数々の問題はあったことだろう。でも、高度成長を軸にして、〝経済〟と〝技術開発〟と〝文化〟は、本当に上手く噛み合っていた。

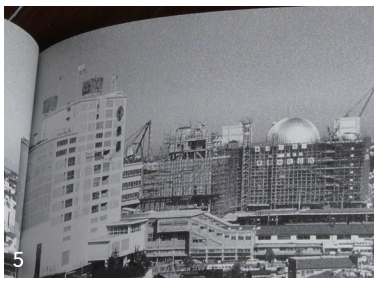
最近、アナログレコードが一部の若者の間で再びブームになっていると聞く。もっとも、それはもの珍しさから関心を持たれているに過ぎないという気がする。

実際、ハードウエアを担う日本のオーディオメーカーといえば、海外の会社に事業を売却したり、倒産してゆく会社も後を絶たない。

アナログレコードが全盛の頃は、日本の精緻な〝モノづくり〟が十分に生かされていたと言われる。それがデジタル化にともなって、半導体の組み合わせにより製造が容易になると、海外のメーカーとの価格競争が起こり、次第に日本のメーカーは追い込まれていったという。

さらに近年は、米国が牽引する音楽配信の時代へと移行している。スマホなどの機器で、デジタル・データをオフラインでも再生出来て、スマートに、かつ膨大な数のソフトを所有せずとも聴けるようになった。

ところが、ピュアオーディオを愛する私の友人に聞いた話では、古い音源を最新機器の規格に変換することには無理があって、本末転倒なのだけれど、音源自体を加工してしまっているとのことだった。聴いていて加工されている音と分かるので、好みではないと言っていた。



1. 閉店直前の東急東横店(写真右)。東館は既に取り壊され、空が広がる　2. 二色の餡が餅皮に包まれ塩漬けの桜の花びらが添えられた、菓匠 高おかの「春がすみ」　3. スマホを覗き込む人々　4. パルコ6階の任天堂の店内。派手な色彩が目につく　5.『木村伊兵衛の昭和』(筑摩書房)より、昭和31年の渋谷の様子。東急東横店(写真左)と建設中の東急文化会館(写真右)が見える　写真／木下真理子

この話に似たことで思い当たるのが、これも米国技術に由来する「4KTV」。この技術に合わせるように作られた番組プログラムの色調は、賛否は分かれるところだが、鮮やか過ぎはしないだろうか。

こうした傾向が続くと、繊細な〝ニュアンス〟を捉える日本古来の感受性は衰え、感情の奥行きや表現の深みも分からなくなってしまう。

オリンピックという一大イベントは、スポーツの祭典にとどまらず、最先端テクノロジーや伝統文化が脚光を浴びる機会でもあるけれど、私たちは今、日本人としての自信をどこまで抱けているだろう……。

新型コロナウイルスの影響を差し引いても、今の東京には、人々のやるせなさと、薄気味悪さが入り混じって漂っているように感じてしまう。

そんな折、親しくしている人から和菓子を頂いた。

口触りの良い柔らさと、そこはかとない甘さが心地良くて、これはどこのお菓子ですかと尋ねたところ、店名と場所を教えてくれた。

その店は、都心の一等地でもなければ、再開発地でもなかった。

先にインターネットで検索。すると、公式サイトにはトップページに和菓子の写真が数点載っているだけ。殆ど自己PRなどされていない。

某人気グルメサイトに掲載されていた僅かな口コミを見て、地元でこよなく愛されている店であることが分かった。和菓子をくれた人は、地元ではないけれど、食物アレルギーで、この店のお菓子は人工甘味料を使っていないから食べられると嬉しそうに話していた。

私は、東京は稲城市にある、「菓匠 高おか」という名の店を訪ねた。

迎えてくれたのは、優しい温もりがこもる和菓子と、良心的な価格で商いをしている年輩のご夫婦。店では茶席菓子も作っているという。

これも日本文化の顔というべき茶の湯は、〝ハレ〟の場のおもてなしというイメージがある一方で、日常の〝ケ〟の営みを芸術まで高めたもの。

何でもない日常の些細な出来事に価値を見出せた日本人は、モノクロ写真の時代を経て、脇道に佇む小さな店で、今なお健在！

木下真理子(きのした・まりこ)　雅号は秀翠。大東文化大学卒業。高木聖雨に師事。映画『利休にたずねよ』、NHK『にっぽんプレミアム』などの題字を手掛け、日経リュクスの連載も持つ。伝統文化としての書の魅力を現代的なアプローチにより伝える『日本の美しい文字プロジェクト』も国内外で展開中

この原稿は4月第1週に書かれたものです。